



僕という人間について。

---

雨は嫌いじゃない。だが、雨は僕の心を更に沈ませる。更に、と言った理由は特にはない。強いて言うなら今日が朝練のある日だと言うことだ。高校生にとって朝練は憂鬱でしかない、と思っている。ふと目線を上げれば雨が窓を装飾していることに気付いた。こっちの方が綺麗じゃないか。奇麗、と書くべきか。窓の向こう側はまるで僕の心のようにはっきりと見えなかった。

そんな独りの男子高校生が都内にいたとして、俯いた生活をしていたとして、いつ光は差すのだろうか。今から書くのは、そういう物語だ。

学校に着いた。着いてしまった。高校一年生である僕は先輩達よりも早く来て朝練の準備をしなくてはならなかった。今日もいつもと同様に眠そうな目を擦りながら準備に取りかかっていた。湿気がまだ薄暗い体育館の床を巧く湿らせていた。雨の日は雑巾掛けをしなくてよかった。そういう意味でも雨は嫌いじゃない。先輩たちが入ってきて僕ら一年生は威勢良く挨拶した。毎日のルーティーンだ。ひたすらに繰り返される毎日に嫌気がさしていたのは間違いない。都内でも人気のこの高校に入学して約二ヶ月が経つが特にこれと言ってきらめいたことはなかった。

中学の話をしよう。自分で言うのもどうかと思うが良い意味でも悪い意味でも僕より中学校生活が一番充実していたのは少ないと思う。つくづく思う。悪い意味の充実の方が多い。それは次のようなことがあったからだ。

中学二年生。秋。性格が歪んでいた僕でも奇跡的に彼女がいた。相手はそのとき中学三年生であった。受験期ということもあり、別れることになった。人生最大の失墜をした僕に同じクラス神戸は優しく話を聞いてくれた。こういった女性に弱い僕は中学三年生になる頃、神戸と付き合うことになった。お互いに寂しがり屋であった。孤独が嫌いだった。孤独を埋めるように神戸と日々を過ごした。決して人に自慢できるような綺麗な恋愛ではなかった。喧嘩も多かった。だが必要とされることが気持ちよかった。人生で最も辛い時期を共にした。冗談ではなくずっと一緒にいたいと思った。

ちなみにまだ神戸と僕の関係は続いていた。違う学校ではあったがお互いにお互いしかいない、と思っていた。

朝練が終わり朝練より眠い授業が始まった。授業中はバレないように、寝るか本を読むか音楽を聴いている。何故真面目に授業を聞かないのか、と聞かれてもよくわからない。わがままだが好きなこと以外には集中出来ないのだ。勉強自体は出来る方でも出来ない方でもない。だから授業を真面目に聞かないのかも知れない。

話を戻して僕は神戸のことが好きじゃなくなっていた。神戸が高校生になりキラキラした少女になった。僕はそういった人はあまり好きではなかった。自分を飾り付けた神戸は確実に綺麗だった。しかし僕はありのままに僕を欲する神戸が好きだったのだ。変わってしまった彼女に僕は別れを告げた。

